『古事記』テクスト一試論

――スサノヲと魂振り――

伊澤正俊

1　はじめに

『古事記』において、高天原で数多くの大罪を犯したスサノヲノミコトは八百萬神の議りによって高天原を追放される。

ここの部分、底本を真福寺本とする、「思想大系本」では次のように表現されている。

於是、八百萬神共に議り而、速須佐之男命於、千位の置戸を負せ、亦鬢ト手足爪及を切り祓へ令メ而、神夜良比夜良比岐。

「亦鬢ト手足爪及を切り祓へ令メ而」をどう読むかが古来問題になっており、西郷信綱は『古事記注釈』第一巻において諸本の校合をしている。

下から二字目を「祓」と記す本（真福寺本、道祥本、春瑜本、道果本）と、「抜」と記す本（前田家本、猪熊本、度会延佳鼇頭古事記、記伝）とがあり、そのどちらを採るかで大いに解釈が違ってくる。[注1]

としている。

近現代の諸本の違いも述べている。

大系本、全書本等、現行のものの多くは記伝に従い「抜」を採っている。しかし、私は「抜」ではなく「祓」の方を採る。（「祓」とするものに田中頼庸校訂『古事記』、新講、近くは西宮一民『古事記』などがある。）[注2]

そこで西郷は、

記伝のように「亦鬚を切り、手足の爪をも抜かしめて」と果して訓めるかどうか。（中略）「亦……及……」といういいかたが古事記では例えば「亦其身生二蘿及檜榲一」（上巻）、「亦定二賜国国之堺及大県小県之県主一」（中巻）、「亦其妹口比売及奴理美」（下巻）という風に一つの様式として用いられている点を、これは無視しすぎている。これらの例から右一句は「亦切二鬚及手足爪一令レ祓而」と訓むべきで、「亦切レ鬚及手足爪令レ抜而」でないのを確かめうる。(注3)

としており、この説は正しいであろう。西郷はたたみかけるように、

「鬚を切り、亦手足の爪をも抜かしめて」というのでは、なぜ爪の方だけ使役形なのか、何とも日本語として落ちつきが悪い。(注4)

としている。西郷説は揺るぎの無いものであろう。

2

それでは「千位の置戸を負せ、」とは簡略的にまとめれば三浦佑之氏の述べる如く、

たくさんの台の上に調え並べた償いのための品物を、犯した罪に対する代償として出させたのである。(注5)

と採るものがよろしいであろう。一方「祓」と採る方は三浦氏は、

身体に生じ伸びたヒゲ（髪）や爪は穢れのたまるところであり、それを切って祓うことで、身についた穢れを除去するのである。(注6)

としている。片方は罪の償いをし、片方は穢れを除去するということで本当に良いのだろうか。両方とも罪の償いであり、両方とも祓えと考えることはできないのであろうか。

先ず後者から見てみよう。思想大系本頭注において、

千位置戸は祝詞式、大祓詞に千座置座とみえ、罪科の代償として差出す品物（祓えつ物）を置く台。この部分、多くの祓えつものを科し、祓料として体の一部の髪や爪をとったものと解される（後略）(注7)

としており、両方とも祓えと考えている。これはそのように考えてよろしいのではないか。強く支持したい考え方である。

一方両方共に罪の償いであると考えられないかを探ってみたい。先ず三浦説を踏襲して前者を犯した罪に対する代償と

して出させたものと考えて良いであろう。思想大系本も罪科の代償としている。即ち罰なのである。

それでは後者を罪の代償として行なわれたことを立証していきたい。

スサノヲは誕生後は次の様であった。

速須佐之男命、所命しし国を治さ不而、八拳須心前に到るまで、啼き伊佐知伎。其ノ泣く状者、青山は枯山如す泣き枯らし、河海者悉く泣き乾しき。是を以ちて、悪しき神之音なひは、狭蠅如す皆満ち、萬ノ物之妖悉発りき。

ヤツカヒゲとはあごひげであり、あごひげが長く伸びて胸の前辺りまで垂れるほどになってもずっと哭きわめいていた、ととれる。これは大人になるまでということであり、垂仁記、ホムチワケが、ものを言わず、

故、其ノ御子を率て遊びし状者、尾張之相津於在る、二俣樞を二俣小舟に作り而、持ち上り来て、倭之市師池・軽池に浮ケ、其ノ御子を率て遊びき。然あれドモ、是ノ御子、八拳鬚心前に至るまで、真事登波受。

とあるのも同様であろう。また『出雲国風土記』のアヂスキタカヒコが、

大神大穴持命の御子、阿遅須枳高日子命、御須髪八握に生ふるまで、夜昼哭きまして、御辭通はざりき。

とあるのも同様であろう。ものを言えなかったのである。

青々とした山は枯れ山のごとくに泣き枯らしてしまい、河や海の水はスサノヲの涙となってことごとくに泣き乾してしまうほどじゃった。

このために、蠢きだした悪しき神々の音は、五月蠅のごとくに隅々にまで満ち溢れ、あらゆる物のわざわいが、ことごとくに起こり広がったのじゃった。(ほ)

と表現されているように非常に力を持っており、大人として、それも強力なまさに神がかった大人として表現されている。そしてここだけではない。昇天時のスサノヲの表現も見てみる。

及ち天に参上る時、山川悉動み、国土皆震りぬ。

ということであり、脅威的な力を持った大人神として表現されている。

ところが追放されて降臨する時はこのような表現が無い。高天原での大罪を犯したスサノヲは、髪の毛とあごひげと手足の爪を切り祓えしめた後、全く力を持たない存在として降臨する。『日本書紀』第三の一書も参考になるであろう。

及ち共に逐降ひ去りき。時に、霖ふる。素戔嗚尊、青草

を結束ひて笠蓑として、宿を衆神に乞ふ。衆神の曰はく、「汝は是躬の行濁悪しくして、逐ひ謫めらるる者なり。如何ぞ宿を我に乞ふ」といひて、遂に同に距く。是を以て、風雨甚だふきふると雖も、留り休むこと得ずして、辛苦みつつ降りき。

このように全く力を持たない完全なる弱者として描かれている。ではどうしてこのような弱者となったのであろうか。詳述してみたい。

3

髪の毛やあごひげはどう考えても深剃りであろう。また爪は深爪に切っていることだろう。こう考えるとこのスサノヲの姿は大人では無い。新生児、乳児、幼児といった方が適切ではなかろうか。このような形で追放し、二度と高天原を攻撃したり害を及ぼさないようにして追放したのである。

これは罪に対する罰と言えるのではないか。大人で強大な力を持っていたスサノヲが、新生児の姿に後退させられてしまう。これは罪に対する罰として八百萬の神々が科したものなのである。罪に対して罰が無いのはどう考えてもおかしい。これを罰とすれば落としどころが見え、落ち着くのではないだろうか。

三浦氏が先述したように千位置土を「償いのための品物を、犯した罪に対する代償として出させたのである。」、思想大系本は罪科の代償としているが、これらは正しいが、これだけでは無かった。新生児とする罰を与えたのである。

『古事記』テクストをどう読むかであって、先述した第三の一書も参考にしかならない。

そして降臨する時は新生児またはそれに近いものとして降りるのであるから、高天原に上る時のような「山川悉動み、国土皆震りぬ。」という表現は出て来ない。

4

次に出雲国の肥の河の鳥髪に降臨する。そしてアシナヅチ、テナヅチ、クシナダヒメの存在を知り、泣く理由を聞く。次にヤマタノヲロチの形状を問う。余りにも有名なので割愛する。

これを退治するためにスサノヲは、

お前たちは、幾たびも幾たびもくり返して醸した強い酒

を作り、また垣根を作り廻らし、その垣に八つの門を作り、門ごとに八つの桟敷を設け備え、その桟敷ごとに酒船を置き、その船ごとに、幾たびも醸した強い酒をあふれるほどに満たして待っておれ[注9]

と教えた。するとヤマタノヲロチはやって来て酒を飲み寝込んでしまった。そこでスサノヲは佩いていた十拳の剣で退治した。

これは智恵の勝利である。新生児、乳児、幼児として追放されたスサノヲは地響きを起こすような力は無い。「山川悉動み、国土皆震りぬ。」などという力は無いのである。残されているのは智力だけである。これを存分に発揮して自分より大きなヤマタノヲロチを退治したのである。智力だけしか残っていなかったとも言えよう。国つ神の親子三人はこの智恵を持っていなかった。

かくしてスサノヲはヤマタノヲロチ退治で勝利をおさめ、この一戦で成長した。クサナギノタチをアマテラスオオミカミに献上し、敵意の無いことを示した。

次にスサノヲは宮を作るのに相応しいところを出雲国で探し求めた。高天原はこれに異をとなえなかった。ここが重要なところではないか。敵意の無い成長したスサノヲに、宮を作ることを許したあるいは黙認したということである。スサノヲは堂々と出雲国を巡り、須賀の地で、須賀宮を作ることになる。そして、

八雲立つ　出雲八重垣　妻籠ミに　八重垣作る　其ノ八重垣を

と記念すべき歌を作る。先述したようにホムチワケもアヂスキタカヒコも声を発しなかった。それなのにスサノヲは新生児、乳児、幼児として追放されたのだが、言葉を発するのは当然として、歌まで作ってしまったのである。これは心身共に成長して大人になったということである。

先に『古事記』には、生得である言語能力を持たない者はそれを得、次に呪言を獲得し、次に作歌能力を獲得して真の成人となり、聖婚を行ない、子を得るという論理、構造、即ち話型が存在する。これは典型的な順にオホナムヂ、ホヲリノミコト、スサノヲ、神武天皇、変異体（ヴァリアント）としてホムチワケが存在する。これを成長譚と名付け、これは『古事記』世界での彼らの活躍の本質として通底しているものである。それは婚姻するまでの成人式としての通過儀礼として存在する。[注10]

『古事記』では、スサノヲ、オオナムヂ、ホヲリノミコト、といったストーリー上の三代を経て歌は獲得され、初代天皇

神武も同様に獲得する。次に歌は高臣へ、臣下・服属者へ、庶民へと伝わり、歌垣も皇室起源として勝利して始まったという論理・構造なのである。『古事記』世界においては歌は完成された人間の証明、そして成人の証明、知力、智恵の証明なのである。『古事記』は歌が皇統起源であること、その苦難の獲得までの歴史と継承の歴史、そして庶民までの普及の歴史を語るための書とも言える。[注11] と述べてきた。

スサノヲは作歌能力を獲得した心身共に成人となったのである。そうであるからこそスサノヲはクシナダヒメとクミドに起こして神を生むことになる。生殖能力が備わったのである。スサノヲは神生みを以前しているが、それはアマテラスとのウケヒにおいてであり、性交によってこの場面で初めて神を生んだのである。

スサノヲが次に登場するのはオオクニヌシが自分の六世の孫として根の堅州国に逃れてやって来た時である。

オホクニヌシ（以下オホナムヂとする。）は、兄弟八十神がいたが、袋を担いでいる賤しい身分の者の仕事をさせられていた。しかしいわゆる稲羽の裸のウサギに出会い、八十神によってひどく傷ついた傷を治してあげ、八十神はヤガミヒメを手に入れられない、あなた様が妻にすることができるでしょうと発する。ヤガミヒメも八十神を拒み、オホナムヂに嫁ぐと明言する。それを聞いた八十神は焼いた岩を転がし落としてオホナムヂに取らせて殺してしまった。しかしキサカヒヒメとウムカヒヒメによって生き返らされる。すると、

麗しき壮夫に成り而出で遊行しき。

と袋担ぎ人からより成長した神として生まれ変わる。

次にやはりオホナムヂをだまして樹の割れ目に楔を打ち込んでその中に押し込め、楔をはずして殺してしまった。そこでまた母神が来て復活させ、蘇らせた。ここには成長したオホナムヂは描かれていないが、おそらくより一層成長したオホナムヂなのであろう。

そして母神は、また殺されるでしょうと言い、木の国のオオヤビコのもとに逃がした。スサノヲのいる根の堅州国に行けと言われ、その通りに行き着いた。

するとスセリビメがおり、お互い目を見合わせて結婚（性交）をした。そして

「甚麗しき神来ましぬ。」

と父、スサノヲに報告する。スサノヲは、「これはアシハラノシコヲノミコトという神だ。」と言い蛇の室に入れられるが、蛇の比礼をスセリビメにもらい、無事に朝を迎え出て来

た。次の夜はムカデと蜂の室に入れられるが、同様にムカデと蜂の比礼をもらい、また出て来た。次は鳴鏑を大きな野に射てその矢を探し取らせた。野に入ると火をつけられまわりから焼かれた。しかしネズミが来て「内はほらほら外はすぶすぶ。」と教えられ、そこを踏むと空洞に落ち、火はその上を燃え過ぎて行った。矢を返したところ今度は八田間の大室に入れた。そしてスサノヲの頭のシラミを取らせようとした。ところがシラミでは無く、ムカデが沢山いた。

ここでわかることはスサノヲが巨大化、巨人化している事実が確認できることである。人間の頭にはシラミはいてもムカデはいない。この広大な部屋に寝ているスサノヲは巨人なのである。だからこそまた妻スセリビメによって木の実を食い破り、赤土と共に吐き出し、それを見たスサノヲはムカデを食いちぎって唾き出したと思い込み、安心して眠ってしまった。そこでオホナムヂはスサノヲの髪をとり、垂木ごとに結び付け、五百人がかりでしか動かせぬ大岩をその巨大な部屋の戸口に運んで来て閉ざして、妻スセリビメを背負い、宝物である生太刀と生弓矢、天の詔琴を持って逃げ出した。

これはやはりスサノヲ巨人説を疑うことはできないであろう。スサノヲは根の堅州国の支配者であり巨人なのである。出雲では生殖能力を身に付けた大人であったが、根の堅州国では娘スセリビメを持つ巨人にまで成長したのである。

三貴子の一人として生まれたスサノヲはアマテラスに会いに行く時、「山川悉動み、国土皆震りぬ。」と強大な力持った大男と言っても過言では無いであろう。そしてアマテラスとウケヒをして勝ち多くの悪行をなした。この大男の力は絶大なものであった。例えば毛色のまだらな馬を尻の方から逆さまに皮を剝ぎとって穴から落とし入れて、機織女を驚かせ、その結果梭で陰部を突き刺して死なせたことなどは強大な力を持った大男でしかできなかったであろう。ところが八百萬の神々によって祓えつ物を出し、罰を受けて新生児化、乳児化、幼児化して追放されたが、ヤマタノヲロチを智恵によって退治し、成長したスサノヲは大人の証拠でもある歌を言挙げし、性交によって子供をなし、須賀宮に一人前の王として君臨したのである。そしていつの間にか根の堅州国の王となり、やはり巨人化していて王権の呪物である生太刀、生弓矢、天の詔琴を持つ存在になっていた。巨人として昇天し、そして新生児、乳児、幼児となり追放されて、そして出雲で成人となり、そして根の堅州国で巨人として復活したのがスサノヲなのである。

話を少し戻しておく。天の詔琴の絃が樹に触れて大地が揺れ動く程鳴り響いた。スサノヲは目覚め、垂木ごとに結ばれていた髪の毛を引き、大室を引き倒す。これも巨人のなす業である。それをほどいたスサノヲは黄泉つ平坂まで追って行き、叫んだ。

生太刀と生弓矢で兄弟を坂の尾根まで追いつめて、また河の瀬まで追い払って、葦原中国を統治してオホクニヌシとなり、またウツシクニタマとなり、スセリビメを正妻として、宇迦の山のふもとに、土深く掘り下げて底の磐根に届くまで宮柱を太く立て、高天原に届くまで高く千木をそびやかして宮殿を造って住め。こいつめ。

そしてオホクニヌシは兄弟を追い払い、初めて国作りをした。

5

ここで要点を少しまとめておく。スサノヲは強大な力を持った神として昇天し、罰を受けて新生児、乳児、幼児化した。次に智恵だけでもってヤマタノヲロチを退治した。これは成人式のようなものであり、成長したのであろう。そしてクシナダヒメと性交し、神を生む。葦原中国の王、地上界の王となっている。

オホナムヂは袋担ぎ人であったが、火だるまの巨石で死亡し、麗しき壮夫として復活する。これは成人式の通過儀礼なのではないか。次に木の楔をはずされて死亡するがまた復活させられる。根の堅州国では蛇の室、ムカデと蜂の室、鳴鏑を取りに行かせる、シラミ取り、実はムカデ取りであったが、これらの試練を乗り越える。これらは成人式だと西郷信綱は『古代人と夢』で詳述しているがその通りであろう。

スサノヲは一度幼児化したものが地上でも根の堅州国でも王となっている。

オホナムヂは賤しい身分から地上の王となっている。

両者を比較すると幼児と賤しいがパラレルとなっている。一度弱い者にならなければ王になれない。弱者こそが王にふさわしい。そして王が王を育てる。これは今まで注目されなかったが、こう言えるのではなかろうか。

スサノヲは地上→天上→地上→根の堅州国となって王となっている。性格は異なるが、オホナムヂは賤しい神→死→再生→死→再生、そして根の堅州国で試練→再生→試練→再生→試練→再生→試練→再

生となっている。そして地上界の王となっている。

ここでスサノヲとオホクニヌシに共通しているのは両者共に魂振りを行っているのではなかろうか。魂振りとは『日本国語大辞典』によると「活力を失ったたましいを振り動かしたりして活力を与え、再生すること。また、その術。」とある。これは天皇の魂などを箱に入れ、揺り動かして活性化させ、再生することに始まる。しかし、揺り動かして再生させるというのは古代人の持っていた認識、発想であり、後には活性化させることによって成長させる認識、発想になったと考えている。スサノヲは地上・天上・根の堅州国との空間的魂振りであり、垂直軸に魂が揺さぶられ、再生は、当然のこととして、成長したと認識、発想しているのである。オホナムヂは生と死を繰り返す魂振りなのではないか。

逆に言えば魂振りの概念を片方は空間軸で文章化したものと死と再生という時間軸で文章化したものがこれら二つの話となっているのではないか。

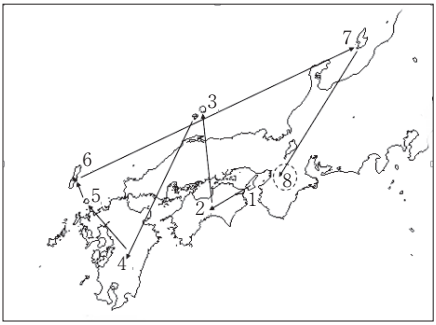
『古事記』テクストを読む時、深読みは誤読に繋がるであろう。ではあるが、古代人の書き上げたこの『古事記』から、古代人の心理の深層、古代人の無意識という意識を読み取って良いはずであるし、読み取れるものなのではなかろうか。筆者は古代人は無意識下であるか意識していたかわからないが、『古事記』テクストをこのように読むことが未来への研究の一歩に繋がっていると信じて止まない。繰り返すが魂振りの概念を文章化したものがこれら二つの話なのである。そうであるからこそ二神共に成長して王となり、性交によって神々を生んでいる。

魂振りとは単なる儀式なのでは無いだろう。魂振りの儀式の奥底にあるものはそのゆらゆらと動かし、魂を活性化させて、成長させる意識そのものであるはずである。それを意識していたか無意識なのかは判断できないがこのスサノヲとオホクニヌシの神話は魂振りなのである。

6

そう考えて来ると『古事記』テクスト世界には魂振りと呼べるものがまだまだ存在するのではなかろうか。

イザナキ・イザナミは天上界から天の浮橋に降り立つが、そこからオノゴロシマを作るが出来上がるとそこに出て立ち、天の御柱を廻ってミトノマグハヒをしようとイザナキが提案し、イザナミが承諾する。イザナキは、「お前は右より廻り



逢へ。私は左より廻り逢おう。」と言って、そのようにし、イザナミが先に「アナニヤシエヲトコヲ」と言い、イザナキが「アナニヤシエヲトメヲ」と言う。イザナキは「女人先づ言へるは不良し。」と言い、クミドに興して生みませる子は、水蛭子。淡嶋を生む。両方とも不完全な子であり、二人は、この子たちは良くない。天つ神に聞いてこよう。と言って天上界に参上り、天つ神の言葉を請うた。すると占いで、女が先に言うのは良くない。また戻りて改めて言へ。と言われ、天の御柱を廻って今度は先にイザナキが「アナニヤシエヲトメヲ」と言い、イザナミが「アナニヤシエヲトコヲ」と言い、御合して生みませる子は、淡道之穂之狭別嶋を初めとする八島であった。これを図示してみる。

各地を無秩序に廻った後、最も重要で大きな大倭豊秋津嶋を生む。

この無秩序な道行の意味を教えてくれるのがホムチワケである。

ホムチワケは市師池・軽池に船を浮かべて遊ばせたが、「八拳鬚心前に至るまで」ものを言わなかった。これは魂振りの行為ではなかろうか。

次に、「今高往く鵠之音」を聞いて初めて片言を言った。そこで山辺之大鶙を遣わしてその鵠を取りに行かせたが、その鵠を追った大鶙の行動は、鵠に付いて行っただけだから、鵠の行動は、

故、是ノ人其ノ鵠を追い尋ね、木国自り針間国に到り、亦、追ひて稲羽国に越えて、即ち旦波国・多遅麻国に到り、東ノ方に追ひ廻りて、近淡海国に到りて、及ち三野国に越え、尾張国自り伝ひて科野国に追ひ、遂に高志国に追ひ到り而、和那美之水門於網を張り、其ノ鳥を取り而、持ち上りて献りき。

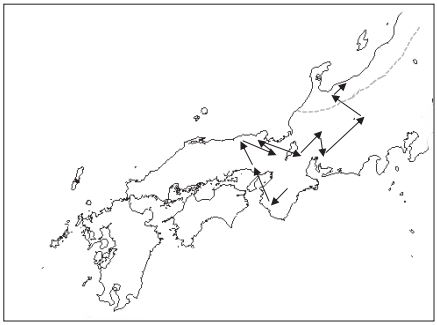
となっている。結局ホムチワケは鵠を見てものを言わなかったが、この一連の表現からは鵠を呪力あるものとみている事がわかる。

さてこの鵠の道行とも言うべき行動を、古代の行政区画で

表し、鵠の発見地点であり、出発地点でもある軽池を加えて示すと、軽池（大和国）→紀伊国→播磨国→因幡国→丹波国→但馬国→近江国→美濃国→尾張国→信濃国→越国→和那美の水門（越国）という順序になる。この鵠の道行を順序通り図示してみると図のようになる。

道行は魂を各地に移動させることになり、魂をアトランダムに揺り動かしており、その認識、発想は魂振りなのである。

これは各地を廻って魂振りを行った鵠の成長した魂を手に入れてホムチワケに言語能力を身に付けようとした行動なのではないか。



八島の出産とホムチワケの舟遊び、鵠の道行はパラレルであり、その本質は魂振りなのである。

さてものを言わなかったホムチワケであるが、天皇の夢で、宮を天皇の宮殿のように作り修めたならばものを言うようになると言われた。その神を占うと、その祟りは出雲大神であるとわかる。そこでホムチワケを出雲のもとに遣わした。どの道を通るかを占うと、一番近い奈良山を越える道を行くと、足の萎えた者や盲者に会うであろう。河内へと続く大阪山を越える道を行くとやはり同様に会うであろう。一番遠回りの木の国へと続く、掖月の出入り口が良いとの結果が出る。

この一番遠い道を歩ませる。これも沢山歩いて魂をゆらゆらとさせるという意が隠されていると考えられないであろうか。勿論断定はできない。しかし一考に値するであろう。

そして出雲大神を拝み終えて帰り上ろうとする時に、仮宮を造って籠もらせた。そして出雲の国造の租で名はキヒサツミという者が、青々とした木の葉で飾った仮山を造り、肥河の川下に立てて、食事を差し上げようとする時、

「是ノ河下於、青葉ノ山ノ如き者、山ト見ゑて山に非ず。若し出雲ノ石硐之曾之宮に坐す、葦原色許男大神を以ち伊都玖祝が大庭乎。」

ともものを言った。

土橋寛は「呪力ある花や青葉」「青葉の山を象ったタマフリの呪物」「青葉の生命力」「青葉の呪力信仰」[注12]と述べており、特に「青葉の山を象ったタマフリの呪物」はこの場面につい

て述べている。

この青葉の山は、大嘗祭の標山、鎮魂祭の時八足机の上に立てる篊山、後世の祝宴の時に飾る島台などと共に、青葉の山を象ったタマフリの呪物であり、客人はそれを見ることによって健康と長寿を得、ホムチワケノ命は物が言えるようになったのだと解すべきであろう。

そして鵠を追わせたのも魂振りであったと言えるのではなかろうか。この二つの現象はパラレルに見るべきであり、魂振りなのだ。そしてここに「成長」という一単語を入れるべきであり、土橋は無意識のうちにこの概念を入れているのである。

そう考えると日本中を廻り飛んだのも魂振りと言えるのではないか。その結果が最終的に本土の中心である大倭豊秋津嶋を生んだということになるのではないか。これは鵠を追ったのとやはりパラレルに見るべきであり、魂振りなのだ。

そうなると天上から天の浮橋に降り、オノゴロシマに降り、右と左から天の御柱を廻り不完全な子を生んだが、また天上に昇り、また地上へと降り、また右と左から天の御柱を廻り、生みませる子は、淡道之穂之狭別嶋というのも魂振りと考えるのは無理があるであろうか。この程度の魂振りでは淡路島が精一杯で、また日本中を無秩序に廻って国を生み、最終的に大倭豊秋津嶋を生んだということにはならないであろうか。

魂振りとは単なる儀礼なのでは無く、古代人が持っていた、意識上や無意識下の精神構造なのではなかろうか。むしろこの観念が意識化された時、魂振りの儀式というものが出て来て登場するのではなかろうか。

7

こう考えてくると、『古事記』テクスト世界の多くの部分で、意識上あるいは無意識下で魂振りが行われているのではないだろうか。丁寧に見て行きたい。

先ず考えられるのは、黄泉国訪問譚ではなかろうか。イザナミはヒノカグツチノカミを生んだことによって黄泉国に行ってしまう。具体的には、出雲国と伯伎国との堺の比婆山に埋葬した。そこから黄泉国に行ったのだが、これは本文を読み解くと後にわかるように、坂の下、地下深くに黄泉国は存在する。イザナキは帰るように説得するが、イザナミは黄泉戸喫をしてしまった。そこで黄泉神と相談して来るが、私を

見るなと、見るなの禁忌をスサノヲに告げる。そして腐乱したイザナミを見てしまい、逃げ帰る。イザナミには私に恥を見せたとしてヨモツシコメを遣わして追わせる。イザナキはエビカヅラノミとタカミナを捨てるとシコメ達はそれぞれを食べ、その間に逃げる。その後イザナミは自分から生まれた八種の雷神に、千五百という大勢の軍人をそえて追いかけさせた。スサノヲは腰に帯びていた十拳の剣を抜いて、後ろ手で剣を振りながら逃げた。しかし雷神等はなおも追って来て黄泉平坂の麓に到着した時に、桃の実三つを取って投げつけるとみな逃げ帰ってしまった。最後にはイザナミが追いかけて来た。そこでイザナキは巨大な岩を引いて来て黄泉平坂の中程に置いてふさいでしまった。イザナミは一日に千人殺すと告げ、イザナキは一日に千五百の産屋を建てると告げる。この黄泉平坂は出雲国の伊賦夜坂と言われている。この後にイザナキは禊ぎ祓いをする。そして多くの神を生むが、最後にアマテラスオオミカミ、ツクヨミノミコト、タケハヤスサノヲノミコトと三貴子を生む。

イザナキは黄泉国へと降り下り、敵と沢山戦ってまた地上に戻って来る。魂はどれ程か揺れ動いたことだろう。身を清めようとして物を投げ棄て神を生む。次に、上のあたりの瀬は流れが速く、下のあたりの瀬は流れが弱すぎると言って中のあたりの瀬で、水の中に潜って身を洗いすすぎをした。次には水の底にてすすぎをした。次の水の中ほどですすぎをした。禊ぎの最後に左の目を洗うとアマテラスオオミカミ、右の目を洗うとツクヨミノミコト、鼻を洗うとタケハヤスサノヲノミコトが生まれる。

このイザナキの黄泉国訪問譚で妻の屍体を見て驚き動揺し恐怖心の中必死に逃げ魂を振るわし、剣を振り振りし、大岩を動かし魂を震幅させ、水の中に潜って身を洗いすすぎ、水の底や中程で同様にすすぐと行った行為は、魂振りと全く無縁と言えるだろうか。

魂振りによって成長したからこそ三貴子を生んだと言えないだろうか。これはやはり成長譚であり、魂振りを行なっていると言えるのではなかろうか。

次にホヲリノミコトはどうであろうか。ホヲリノミコトは山の獲物を捕り、兄ホデリノミコトは海の獲物を捕る者であった。ホヲリノミコトは山を降りて来て、鉤を何とか借りる事に成功する。この山から降りて海で釣をするという事に魂振りは考えられないか。そして鉤を無くし、鉤を五百個、千

個作るという事に魂は揺さぶられないか。また海辺で泣き患えていた時に魂は揺さぶられないか。塩椎神が船を作って言うことには『私がこの船を押し流すから、しばらく行きなさい。良い潮路があるだろう。そのまま潮路に乗っていれば綿津見宮に着くだろう。その神の宮の門に着いたら、泉のほとりに神聖な桂の木がある。その木に登っていれば、海神の娘があなたを見て相談にのってくれるだろう。』この通りに全てが進み、魂はゆらゆらとして漂流して成長したのではないか。特に船による漂泊は魂振りと言えまいか。だからこそ「麗しき壮夫」と表現されたのでは無いだろうか。だからこそトヨタマビメは目と目を見つめ合わせ、父の海神に報告する。父はアマツヒコの御子、ソラツヒコであるとわかり、厚遇する。そしてトヨタマビメを妻としてさし上げた。ここまでに成長譚が存在するのではないか。魂振りによって成長したのである。

さて鯛から鉤を返してもらい、その時に海神が呪言を教え、後ろ手で返しなさいと告げる。そして「兄が高い所に田を作ればあなたは低い所に田を作りなさい。兄が低い所に田を作ればあなたは高い所に田を作りなさい。私は水を司っているから三年のうちにその兄は必ずや貧しくなろう。そして恨んで攻めて来たら、塩盈珠を出して溺れさせ、もし嘆き謝って来たら塩乾珠で水を引かせ、悩まし苦しめてやりなさい。」と教える。そして一尋ワニが「私は一日でお送りします。」と申し上げた。そして上の国に送ったがこれも魂を振るわせる行動と言えまいか。するとそのようになってホデリノミコトは謝って、「私は夜も昼も護り人としてお仕えしましょう。」と告げる。この田を高い所に作ったり低い所に作ったりするのも魂振りと言えまいか。そしてトヨタマビメは出産するが、ここでも見るなの禁忌を破ってホヲリノミコトは覗き見てしまう。

こう見て来るとホヲリノミコトの海への漂泊を中心としてその前後の行動は魂振りと言っても過言では無いのではないか。

神武東征はどうであろうか。先ず高千穂宮、次に日向より筑紫に、次に豊国の宇沙に、次に筑紫の岡田宮、次に阿岐国の多祁理宮、次に吉備の高嶋宮に行く。次に速吸門でサネツヒコに会い、海路を行く。次に浪速の渡を経て、白肩の津に着く。また楯津で登美に住むナガスネヒコと戦い、兄のイツセは矢を受けて傷つく。そして血沼の海でイツセは傷ついた

手を洗い、清めた。そこから廻って紀国の男の水門に到ってイツセは絶命する。そこから更に廻って熊野の村に到る。そこで大熊に会い、病気になって皆気を失ってしまう。そしてタカクラジの太刀によって正気になる。そこからヤタカラスの導きによって吉野の河の河尻に到って、ニヘモツノコに会う。また廻ってヰヒカに会う。そこからまた廻ってイハオシワクノコに出会う。そして宇陀に出て、ヱウカシとオトウカシの一件が起こる。次に忍坂で土雲（ヤソタケル）達を討つ。次にトミビコを討ち、ヱシキとオトシキも討つ。するとニギハヤヒノミコトが高天原からやって来る。最後に畝火の白檮宮に坐して、天下を治めた。

この複雑な道行きと船に揺られ、遠回りをして廻り、艱難辛苦を経て天下を治めた旅程を魂振りと言うのは誤読であろうか。空間軸と時間軸共に魂振りと言えないだろうか。気絶して正気に戻るのは魂の復活とは言えまいか。それを魂振りと言うのは深読みであろうか。

次にヤマトタケルはどうであろうか。兄のオホウスノミコトを殺害した時はヤマトタケルの魂は荒ぶっていたことだろう。クマソタケル二人を殺しに行き、ヤマトタケルの名をもらう。この女装にまだ幼さを見てとれないか。しかし二人を殺した時は成長していてその魂は更に荒ぶっている。兄を殺し、クマソタケル二人を殺し、成長したことだろう。

次にイヅモタケルを智恵で退治した時は更に成長し、荒ぶる魂を持つ危険な人物になった。次に東国征伐を命じられた時、姨ヤマトヒメノミコトの前では患え泣く。ここで魂は揺れ動かないだろうか。また相武国では向火をつけて難を逃れる。国造等を正攻法で切り殺し、成長を見て取れよう。この焼津の一件の後、走水の海を進めず、オトタチバナヒメノミコトが犠牲になり船は上総へと渡ることに成功する。そして蝦夷等を言向け、山や川の荒ぶる神々を平定して足柄の坂本で、白き鹿を退治し、阿豆麻と命名した。次に甲斐の酒折宮で作歌能力を獲得する。この能力をつけたことは、より成長したと言って良いであろう。次に科野の坂の神を言向け、尾張国に帰る。そこでミヤズヒメと会い、先述したよりもっと高度な長歌を歌い、作歌能力は数段上がっている。そして結婚し、伊吹の山の神を取りに行く。白猪の神に惑わされ、大氷雨の攻撃に遭い、弱ってしまう。弱ったまま各地を廻る。そして「崩」とその死は表現され、天皇に準じている。「御陵」も作られる。そして八尋白智鳥になり、天に翔り、浜に

向かって飛び去って行った。これは魂であり、各地を廻り、後に天皇の大御葬に歌う歌を唱えられる。ここで魂は神格化された真珠のような完全な魂になっていると考えて良いのではないか。ここに魂の揺さぶられての成長、魂振りがあっての成長の結果と考えては誤読であろうか。天皇に準じられたのは、余多の敵を平定し、その猛き魂を十分に振るわせ、魂振りに寄って成長した結果完璧な魂となったのではないか。次に天に翔りて飛んで行ってしまう。これは魂の昇天であり、『古事記』の中でも、最も美しく、完璧な昇天なのではなかろうか。真珠のような完璧な魂は、様々な経験をして成長して磨かれた結果なのであり、数多くの経験が魂を振るわせ、魂振りとなり、成長したのであろう。

仁徳天皇の枯野という船はどうであろうか。兎寸河の西に一つの高樹があった。その影は朝日にあたると淡路島に及び、夕日にあたると高安の山を越えた。この巨木のモノ魂は大きく成長していたことであろう。それを船に作れば非常に早く走る船となった。モノ魂が巨大なものであるからであろう。そこで枯野と名付け、淡路島の清水を難波にいる天皇に朝夕運んでいた。この航海によっても魂は揺られ揺られ、魂振りによってより完璧な魂になっていったのであろう。この船が壊れたので、塩を焼くのに使い、焼け残りの木があったので琴に作った。するとその音は七つもの里に鳴り響いた。これもやはりモノ魂がしっかり残っていたので遠くにまで届いたということであろう。やはりここは魂振りと言って良いのではないか。

8　おわりに

本稿はスサノヲの新たな読みと、魂振りについての大胆な仮説をたててみた。土橋は無意識にはあったが、表現できなかった「成長」という単語、概念を入れてこそ魂振りの本質なのである。少しでも可能性があると読んでいただけたら幸いである。これが『古事記』研究に斬新な空気を吹き込むことになれば研究者冥利に尽きる。

注1　西郷信綱『古事記注釈』第一巻　平凡社　一九七五年一月　三五〇ページ
2　西郷信綱　注1に同じ。　三五〇ページ
3　西郷信綱　注1に同じ。　三五〇ページ
4　西郷信綱　注1に同じ。　三五四ページ
5　三浦佑之『口語訳　古事記』［完全版］文藝春秋　二〇〇二年六月　四六ページの脚注
6　三浦佑之　注5に同じ。　四六ページの脚注

7 思想大系本　五四ページの頭注
8 三浦佑之　注5に同じ。　三五ページ
9 三浦佑之　注5に同じ。　五一ページ
10 拙稿「『古事記』の言語観及び構造（上）――　成長譚を考える　――」『専修国文』第五一号　一九九二年八月　これより採意。
11 拙稿「『古事記』の言語観及び構造（下）――　成長譚を視点として　――」『専修国文』第五二号　一九九三年一月　これより採意。
12 土橋寛『古代歌謡と儀礼の研究』岩波書店　一九六五年一二月　順に三一ページ　一二七一ページ　二八一ページ

本稿における『古事記』の引用は『古事記』（日本思想大系）に拠る。
『日本書紀』の引用は『日本書紀上』（日本古典文学大系）に拠る。
『風土記』の引用は『風土記』（日本古典文学大系）に拠る。

（いざわ・まさとし　東日本国際大学比較文化研究所客員教授）